

がん医療で連携強化

オンコロジーセンター設置

患者さまの体に負担少なく

阪大病院では質が高く、安全ながん医療の確立とがん専門医の育成を目指して、各診療科の連携を強めるとともに、これらのがん治療により重要な役割を果たす放射線治療、化学療法(抗がん剤治療)と緩和医療を充実させるためにオンコロジーセンターを設置しました。

がんの治療は腫瘍を切り取ってしまう外科的な治療が主流でしたが、阪大病院ではこれまで、各診療科において、外科的治療も行



より広範な連携が求められています。また、放射線治療や化学療法のような患者さまの体に負担が少ない治療法の進歩も目覚ましいのですが、専門医があまりいないという問題もあります。さらに、患者さまにみられる身体的・精神的な苦痛の早期の治療とケアによって、生活や人生の質の改善を目指す緩和医療の充実も求められています。

阪大病院にはすでに、放射線治療科があり、外来化学療法も行っており、緩和ケアチームも活躍しています。それぞれに阪大病院のがん治療に大きく貢献していますが、主に各診療科の要請により活動してまいりました。主体的ながん治療にかかわるといふところが少ないのが現状です。

オンコロジーセンターは放射線治療部門、緩和ケアチームと化学療法部から構成されており、各診療科との連携をより強めるとともに、それぞれの部門がより積極的にがん治療に関与していくこととなります。

各診療科はこれまでどおり患者さまの診断を行い、外科的な治療が必要と考えられるときには外科的な治療を主に進めます。しかし、外科的な治療が有効か、それと他の治療法が必要かの判断をする際には、がん専門の医師、がんの画像診断

専門医や看護師、薬剤師らで構成されるカンサーボード(がん委員会)に諮り、最適な治療法を選択することになります。

オンコロジーセンターは緩和ケアを軸とした治療法です。臨床的な治療にあたるだけでなく、放射線治療部門では患者さまの体に副作用が少なく、より効果のある放射線の線量や照射の仕方を検討するために、放射線量の管理をする医学物理学の専門家も配置し、最先端をいく放射線治療を開発していきます。

治療法、新薬の開発に拍車



IT化されたデータ管理で臨床試験もスムーズに

「がんプロフェッショナル養成プラン」(大学院4年)を実施します。初期の臨床研修2年を終え、一般の内科や外科で3年以上経験

を積んだ若手医師のな

門看護師や薬剤師の養成にも力を入れていきます。

オンコロジーセンターの設立で、阪大病院のがん治療がより高度になり、質が高く、安全になると考えています。

審査もスピードアップ

新しい治療法や薬を開発するための臨床試験を活性化させ、阪大病院における医療の質を向上させるために、臨床試験部をスタートさせました。

臨床試験には大きく分けて2種類あります。製薬会社が新薬を開発するために医療機関に依頼して行う治験と医療機関が独自に行う自主研究です。

阪大病院には治験に

臨床試験部は阪大病院におけるこれらの臨床試験を一括して管理する部門です。審査や倫理の基準も統一することになります。患者さまへのインフォームドコンセントについても厳しくチェックしていきます。

特に自主臨床研究部門と新たな臨床試験方法を研究する高度臨床試験部門の充実を力を入れることとなります。

自主臨床研究部門は阪大病院の医師から申請される新しい治療法や薬の新しい使い方のどのテーマを審査、データ管理から報告書提出までを一括管理します。

高度臨床試験部門ではPET(陽電子放出断層撮影)を利用して、微量の薬物を投与するだけで、その薬物の体の中での動きがつかむことができるようになっていきます。マイクロドージングと呼ばれる臨床試験ですが、阪大病院には世界最高性能のPET/CTがあり、核医学診療科ではPET用の新しい試薬の開発も行っており、研究成果が期待される部門です。

また、臨床試験部では毎年、セミナーを行い、医師に臨床試験についての知識を深めてもらうようになっています。セミナーを受講しただけでは、臨床試験の申請をできないようになり、臨床試験そのものの質も向上させていきたいと思います。佐古田三郎部長は「阪大病院における臨床試験の質を高め、より安全に行われるようになり、患者さまへのインフォームドコンセントは十分に行い、臨床試験の結果が患者さまに反映され、治療の質向上に貢献するようにしていきます。患者さまの臨床試験への積極的な協力をお願いいたします」と話しています。

最先端の脳腫瘍手術

脳神経外科

阪大病院の脳神経外科は脳腫瘍、脳血管障害(脳卒中など)、機能性疾患(パーキンソン病、てんかん、不随意運動など)と脊髄神経疾患(頸椎や腰椎のヘルニアなど)、その他(頭部外傷、先天性脳疾患など)の5グループに分かれ、大変守備範囲の広い診療科です。



脳磁計で脳の機能を見ることで、治療の質が向上した

負担をかけずに、安全で質の高い治療を行うことができるようになってきました。中でも脳腫瘍の手術においては、事前にCTやMRIで腫瘍のある場所を特定することはもちろん、その周辺の脳機能がどのようになっているのかを神経細胞が出す微細な磁場をとらえる脳磁計(MEG)で解析できるようになりました。それらの情報をもとに、どのように腫瘍を切除すれば、脳の機能を損ねずに取れるのかを事前に

にシミュレートして、手術を行えるようになってきました。さらに、手術中に麻酔を覚まして、脳の刺激を行い、機能を損なう危険性がないかを確かめる覚醒手術の導入により安全で正確に腫瘍を切除できるようになりました。また、ナビゲーションシステムも使用することで、脳腫瘍の手術をより確実に進めるようになりました。

また、阪大病院独自の脳腫瘍の治療法として、免疫療法があり、WT1と呼ばれるワクチンを投与します。現在は再発した悪性脳腫瘍に対する臨床試験中ですが、WT1を投与しなかった同様の患者さまに比べ生存期間が1.5倍に伸びることがわかっています。これからの症例数を増やして、一般的な治療としたいと考えています。

機能系のグループでは脳磁計によって作られた脳磁図によって、脳のどの部分に異常があるのかが一目でわかるようシステムを確立しました。また、MRIによって運動や視覚などに関係する神経線維の走行を映し出すことのできるシステムも開発しています。脳磁図と神経線維の走行がわかることで、機能系の疾患に関しても効果的な治療を行えるようになってきたのです。

院内感染防止に全力

感染制御部



感染制御部が研修医らに行っている講習会

入院している患者さまや外来を受診された患者さまが院内で新たな感染症にかからないように、阪大病院感染制御部は感染症の制御を行っている部門です。感染制御部では病院内のどこで、どのような感染症が発生しているかを継続的に調査し、各部署に定期的に報告しています。そうすることで、各部署での感染症の発生や増減など経時的な変化が目に見え、増えている部署があればさ

に拘縮が起こった際に、持続的に拘縮を和らげる薬を脊髄を通して投与するバクロフェン髄腔内投与療法(保険適用)も行っています。クモ膜下出血の大きな原因となる脳動脈瘤の治療については、外科的な手術のみならずカテーテル(細い管)を脳血管まで通して、特殊なコイルを詰めて破裂しないようにする血管内手術の経験豊富

な医師もいます。これからの治療で、鼻の粘膜細胞を使って脊髄神経を再生させる治療やコンピュータと脳を連動させて神経の機能を再建させる研究も行っています。

てなければならぬと医師や看護師らが努力をする契機となるから

に、患者さまからの感染も防ぎ、病院の診療を安全に継続するよう

にしています。また、医師や看護師が注射針を誤ってささないようにしたり、手洗いを徹底したりするなどの感染予防に対する教育も定期的に行っています。

このようにして、院内感染の機会を減らすことで、院内における感染症の減少に貢献し、その結果抗生物質の使用量の減少につながっています。抗生物質の使用量が減るといことは、耐性菌が生まれてくる環境が少なくなり、耐性菌そのものの減少にもつながります。

また、感染制御部の

米国有数の病院で看護教育を学ぶ



阪大病院看護部の谷浦・教育看護部長は木村看護教育振興財団の援助を受け、米国有数のマグネットホスピタルであるメイヨークリニックで1カ月間、看護教育についての研修を受けてきました。

大きな役割として、院内感染が集団発生する事態(アウトブレイク)が起こったときの迅速で適切な対応をとることも求められています。このような事態には、検査部と協力して、感染原因を調べて、迅速に予防対策を実施しています。

このように、感染制御部では、阪大病院の患者さまと職員を感染症から守りながら、安全でよりよい医療を受けていただくできるように活動を行っています。

谷浦師長は「職員から評価される病院が結果的に患者さんからのよい評価につながるのだということを実感できた研修でした。この経験を生かし、今後の教育体制を考えたいと思います」と話しています。

谷浦師長は「職員から評価される病院が結果的に患者さんからのよい評価につながるのだということを実感できた研修でした。この経験を生かし、今後の教育体制を考えたいと思います」と話しています。

谷浦師長は「職員から評価される病院が結果的に患者さんからのよい評価につながるのだということを実感できた研修でした。この経験を生かし、今後の教育体制を考えたいと思います」と話しています。

谷浦師長は「職員から評価される病院が結果的に患者さんからのよい評価につながるのだということを実感できた研修でした。この経験を生かし、今後の教育体制を考えたいと思います」と話しています。

故郷の小学校と院内学級 テレビで結んで卒業式

心臓病で阪大病院に長期入院している富山県出身の小学6年、山下真緒さん(12)の卒業式が3月18日、インターネットを利用したテレビ会議システム(NPO法人ブロードバンドスクール協会提供)で故郷の小学校と病院を結んで行われました。

1学年12人という小さな学校にいた山下さんの「友達と一緒に卒業したい」という願いがかないました。山下さんは、同じように長期入院が必要な子どもたちも、インターネットを使えば離れた場所になっても友人や家族と同じ時間を共有できることをもっと広めたいと、テレビなどの取材にも快く応じていました。



リニアック更新、がん治療に威力

放射線治療装置(リニアック)が全面更新されます。放射線治療部門には2台のリニアックがありますが、すでに新型装置1台が稼働を開始しており、現在2台目を工事中です。完成すればがん治療に威力を発揮すると期待されています。

新しく設置されるリニアックはIMRT(強度変調放射線治療)と呼ばれる高精度照射が可能となります。放射線ビームを複雑に調整することにより、がん病巣の形状に合わせた線量を調整し、周囲の正常組織の被ばくを減らせるのです。これにより、がんの治療率の向上と、副作用の低減が実現できます。また、いわゆるピンポイント照射と呼ばれる定位照射を体幹部にも使えるよう準備しています。

ジミー大西さんのアート除幕

小児医療センター「こどもの森」で、2月28日、ジミー大西さん制作のホスピタルアート『野原の窓』の除幕式が行われました。

林紀夫病院長、福澤正洋センター長のあいさつに続いて、除幕のかけ声とともに、遊び心あふれるアフリカの動物たちが描かれた3枚のカラフルな絵が組み込まれた大きな窓が現れると、病棟の子どもたちの歓声が上がりました。子どもたちはさっそく、窓から中をのぞくなど手で触れられるアートを楽しんでいました。

また、3月8日には小児医療センターの内覧会と開設記念パーティーが開かれ、OBの先生や看護師ら約50人が来賓として出席し、大学病院のイメージを変える小児病棟を実際に見て、話の弾む和やかな交流の会となりました。



オンコロジーセンター開設記念講演会 第4回がん診療市民公開フォーラム参加者募集

〈日時〉6月28日(土)午後1時~4時
 〈場所〉大阪大学医学部講義棟A講堂
 〈定員〉250人 参加無料
 (申し込み多数の場合は抽選)

- 〈講演内容〉
- 阪大病院オンコロジーセンター開設にあたって
オンコロジーセンター長 野口眞三郎教授
 - 化学療法の現状
化学療法部 水木満佐央病院教授
 - 放射線治療と医学物理の現状
オンコロジーセンター副センター長(医学物理室長) 小泉雅彦特任教授
 - 緩和ケアの目指すもの
医学部緩和医療学講座 恒藤暁教授

〈申し込み方法〉
 往復はがき(1通につき1名)に必要な事項(氏名、住所)をご記入のうえ、6月6日(金)必着で下記へお申し込みください。ご参加いただける方には参加票(返信はがき)を送付致します。
 ※申し込みされた方の個人情報参加に伴う連絡の回答にのみ使用します。

〈はがきの送付先〉
 〒565-0871 吹田市山田丘2-15
 大阪大学医学部附属病院総務課広報評価係内
 市民公開フォーラム係
 〈お問い合わせ〉
 大阪大学医学部附属病院総務課広報評価係
 TEL: 06-6879-5020、5021

ホスピタルミニニュース